

物も昔とは事情が変わっておるようですが、しかし天安門の広場をはじめ、あちこちに思い出があります。

私の最も親しく、お互いに信じ合っておりました中国人は、本当に私が地方人として北京から引き揚げて来る時に、何気なく言ってくれました、「ダークイ（大槻）、ダークイ、また必ず来る時がある」と言ってくれました。「日本人が来てくれる時が必ず来るから、その時は喜んで迎えるから来い」と言ってくれました。本当に涙を流して送ってくれたことを頭の中に覚えていきます。

当時は汪精衛という日本寄りの中国人もいましたが、終戦になってからは蒋介石で、その後、今の中国共産軍が蒋介石に代わって大陸の方を治めており、蒋介石は台湾省に移っています。その台湾に行きますと、台湾は中国の一部なのだ、中国の大陸を含めての中国であって、台湾は一つの省なのだ、私ども観光客にも説明していたことを記憶しています。

今後とも折があれば、中国へ行きたいと思っており、昔いた家やら寮へ足を運びたいと楽しみにしています。

ます。

死線を越えて

京都府 四方 ふじ枝

私の夫、四方為夫は平成九（一九九七）年五月三十一日、八十八歳でこの世を去りましたが、亡くなるまで御国の為にと、種々の仕事を通じてご奉公して参りました。

夫は支那事変のみ参戦しております。昭和十二（一九三七）年八月二十七日、五人の子供を残して福知山歩兵第二十連隊に応召、入隊致しました。

以来、中国各地を転戦し奮戦しておりました。ここにあります第十一軍司令官岡村寧次大將より頂いた感状がその一端を物語っていると思えますし、功五級金鵄勲章も頂戴しておりますので、勇戦奮闘してくれたと思えます（掛軸になるような大きい立派な感状で功績が詳細に明記してあります）。

戦場の様子は、昭和五十九年八月十五日発刊された郷土の人の戦争体験記第一集と、昭和六十年八月七日発刊の第二集に、陣中日記が一部掲載されており、その部分で、その中より特記する箇所がありましたら、その部分を体験談として残して下さいと二冊の戦争体験記を出されました。その中より転載することにします。

昭和十二年八月二十七日応召といえ、あの七月七日、支那事変の勃発からちょうど五十日目にあたる。

この年の八月十五日には中国国民政府が対日抗戦の全国総動員令を下し、大本營を設置し、蒋介石が三軍の総司令に就任した。これに対し、日本政府は直ちに「南京政府断固膺懲」を声明し、日中は全面戦争に突入していったのである。

この風雲急を告げる秋に私は動員令を受け、それから九二年間、昭和十四年八月二十日に召集解除で除隊になるまで、足掛け三年にわたり陣中日記をつけてきた。その中から当時の雰囲気や伝わるような部分を順

次抜粋してみようと思う。

昭和十三年二月六日、晴、気温暖か、出発の日とて相当多忙、次々と面会に来る。午後五時福知山駅に至る。家族や城内村民に見送られ綾部駅五時五十分発にて勇躍発進せり。

二月十五日、午前七時三十分、北京西直門駅発、京漢線の旅客列車にて更に南下、緩連を過ぎ保定に安着、更に石家荘に向け前進す。共産匪の襲撃を受け、鉄道線路破壊されたる箇所あり。危惧の念抱きつつ車中に眠る。

三月四日、当地に来て初めて大隊の将校斥候として任命を受く。任務は一個小隊（六分隊五十四人）を指揮し、彰徳西方二十四キロの水治鎮に行き、その道路及びその東方十キロ位の丘陵地帯の地形及び戦術上の価値判断をせよというにあり。午前八時出発、水治鎮に向かう。大した警戒を必要とせず、本道上を予定の如く前進し、午後三時ごろ水治鎮に至り、第二中隊と連絡し、同地に宿泊す。四囲敵の中にて相当警戒を要する状況なり。

三月五日、午前七時水治鎮を出発し屹嶺に向かう。午前八時五十分ごろ敵二十五人程より射撃を受く。更に前進すれば彼ら西南方に退却せり。迂曲の山道を案内人を立てて、更に前進。午前十一時二十分、行程約半分の地にて昼食、午後十二時三十分同地発、山道を行き、午後三時三十分宋栄莊に到着。予定の道路を彰徳に向かい帰還、時に午後五時三十五分、無事任務を達成したり。

三月六日、二日間の行軍に相当疲労。午前中要図にて敵状及び丘陵地帯の視察状況を報告す。

三月十二日、午後十一時、非常呼集あり。磁県東方二十キロの呉村に於いて工兵隊、敗残兵三百人と交戦苦戦中の報に接し、援助のため7/11、1/4 AG、1/3 B i A、汽車にて応援す。工兵隊の負傷十七人、戦死者五人。

三月十三日、磁県に向かい自動車にて先駆す。午前一時三十分着、尖兵長として呉村に急行、午前四時三十分着、工兵中隊長と連絡し増援の旨を伝う。敵前二、三百メートル、午前五時、榴弾砲一斉射撃、次い

で大隊砲射撃をなし、第一線に展開し、部落内掃蕩を行う。敵は三百、敗残兵として退却せり。退却に際しては、乗馬、死体を遺棄していたり。午後六時、彰徳に帰還。

三月十八日、第十九旅団は劉除名軍を攻撃殲滅するため、主力を以て急進するに決し、第二大隊も一部を彰徳に残置し、急速出動準備す。第七中隊は一小隊を残置し、邯鄲に至り、第九連隊の守備隊と交代を準備す。

三月十九日、午前七時彰徳を後に邯鄲に向かい出発す。午前十時五十分、邯鄲着、夕方までに大体宿舎の準備完了。

三月二十日、午前七時、兵舎引継ぎの交渉、午前八時三十分、出発せるためMGの後に移る。全く兵隊の移動は簡単なもの、大体の道具は放棄して行くのだから。馬糞の中より麦を選び分け、持ち帰る中国人のあわれを思う時、全く同じ人間なのにと驚く。夕方までに落ちついた。

三月二十九日、本日は市丸、小林千代子一行の慰問

演芸があり、中隊は会場準備で多忙なり、午前十時五十分、彰徳より一行到着せり。午後城内、城外の二個所で演奏す。小生会場一切引受け整理に当たたる。集合せる人員一五〇〇人にのぼる。日本女性の慰問、それだけでもう大はしゃぎ、歌いだしたらまた格別。午後五時半終了し、「邯鄲の夢枕」で有名なる盧生の見し夢の家に至り、記念写真を撮り帰還す。

三月二十九日、午後十一時三十分、非常呼集あり、邯鄲東方約一里、小官屯に匪賊約三十人來襲との報に整列。小隊の残留人員三十六人を指揮し、歳田、友繁その他自動車隊小泉伍長他五人、十二時半頃自動車にて急行す。

三月三十日、午前一時、現地に到着、情報蒐集するに敵情不明なるも射撃により威嚇す。敵小銃を数発応射す、よって更に鄭弾筒及びiGの一斉射撃を浴びせ、東南方に退却せしむ。昨日多数の郵便來る。家内よりも來る。また本日、家内より二十日付の手紙來る。家の事情も分かり安心す。梅原氏村師となる、祝詞呈示す。

四月一日、午前八時出發。西方約三里余りの西小屯村付近の状況調査のため一個分隊を率い出發。途中、輜重隊に立ち寄り匪賊襲撃の状況を聴し、七、八十人の土匪が襲撃し、女や牛、馬を多く持ち去つたことを知る。午後十二時半頃、第二小隊中川成市上等兵が立哨中、重傷、両足切断す。入院手術後一日生存せしも傷深きため生命なく死亡す。聞くところによれば本年男子生まれしと、彼の死せる顔見るも若きため神のごとくにして死せり。無論一言もなし、あわれ二十八歳を一期として北支に死せり。夕方兵站自動車隊二個中隊の全滅となりたる、負傷者病院に帰る、誠に氣の毒なり。

四月三日、中川上等兵の遺体を火葬す。午後三時頃納骨せり。

四月七日、邯鄲東南約十二キロに、匪賊一千余昨夜來襲せりとの報に基づき、急遽自動車に乗りて斥候に行く。中途二回得たる情報によると、午前八時、彼らは退却せりと。果たせるかな彼らは該村の土民を殺し、大いに荒らし退却せしなり。負傷者に手当を施し

てやり、全員無事帰還す。

四月十四日、妻からの通信によると、禎子が俺のことを思っていると見えて寝言にまでも言うたとある。父子の情切なるものあり、されど今は私事には一切関せざるべき戦地である。

四月十五日、当地邯鄲の警備を交代することになった。最近編成の佐々木兵团とである。一カ月近く住むと別れるのが心残りである。次はどこに行くのかわからないけれど、第一線に出ることになろう、私としてはその方がよいがどうなることか？

昭和十四年一月二十八日、斥候にて柘茨岑に行く、京山街道の道路確保並びに通信線の確保に任ずるため、毎日斥候を派遣するに決したるをもって、その道路地域まで出向き、地形等を暗記せしめ、正午帰還。内地よりの通信に接したるため各々返事を送る。中でも、為口卯三郎君のお母さんからの手紙は、親子の情溢れ、涙なくしては見られない内容と、女らしい細い点に意を注がれていたのにも感動させられた。

小夜しぐれ 戦死せる子を 思う哉（故為口君のお

母さんの句）

二月二十九日、風雨、故・貴田繁治君の親父さんより来信、いつも戦病死者の肉親よりの手紙来る毎に、涙を新にする。そしてその内容が、深刻に悲しさを盛っていないのと、上手に悲しさを表したものがあつた。一般に故人にかわつてのお礼の言葉が非常に多いことは注目に値する。子どもを持つまではさして動かなくなつた感情も、今では強くなつて来た。それだけに悩みも増大する。心で泣いて顔で笑っているのだ。

二月二十一日、いよいよ鐘祥方面襄河までの進出命令が出た。久しく戦闘から遠ざかっていた後のことと待ち遠しい命令でもあつた。我々は対陣して警備している間よりも戦闘している苦勞の方が強く印象に残っている。戦争にも慣れて、それが勝ち戦の場合であるだけになおさらだ。晴れた空を飛ぶ重爆九機も多分そんな方面に行動したものであろう。独立軽装甲車第二中隊も行動を起こした。

二月二十五日、京山において待機、小島少将の指揮するK旅団は既に相当前進して本朝も砲火を浴びせて

いる。京山西方に出ている第三大隊は、敵の反撃を受けてつても攻撃命令の下るのを待っているが、なかなか下って来ない。小島支隊の陽動に、敵の中央軍二個師団は南方に集結、進出している様子である。

二月二十七日、曇、午後九時、出動命令あり、真っ暗な道を一路敵陣地に向かう。行程約二里にして敵の第一線陣地偵察。今夜中に、明払曉攻撃の拠点を確保すると共に、敵前において工兵隊の架橋も始め、いよいよ戦闘開始となる。

三月二日、雨、六時未明、雨中敵と交戦、三時頃敵陣地を完全占領し、官橋舗付近の敵を駆逐し一路追撃に移る。降雨ますます激しく豪雨となる。陣家集東方一キロ余の所を前進中、片山惣一上等兵、左側に貫通銃創を受ける。

三月三日、東橋鎮東方の敵陣地を攻撃、降雨激しく戦闘進捗せず、至る所に少数の敵ありて射殺す。午後三時頃、敵の左翼より後方に迂回し、敵陣地の背後に迫る。この時、北部の山の南側を敵数千の退去するのを見る。六時頃、退却の二百人に対し、わが小隊は徹

底的打撃を与えたり。

三月六日、雨、六時三十分、苗家集を経て長壽店に向かう。午後七時頃敗退する約二百人の敵を急迫し、捕虜二、通信器材多数を捕獲し大打撃を与え、夜に入りたるため長壽店東方二里の地点に宿泊す。行軍行程約九里。

三月二十六日、曇、鉄道警備もだいぶ慣れてきた。長い間、山間僻地での戦闘と、四カ月にわたる都会を見ない生活から、広域の電灯を見、孝感で汽車を見て、治安の確立したことに驚かざるを得ない。子どもらもよく慣れて、毎日終日来て遊びまわる。中国語の勉強にもなり、また暇つぶしの相手としても役に立つ。やはり中国は、鉄道付近だけは発達して、文化を築きつつあったものと見える。

四月四日、中国人の宜撫工作上の要点

- 一 子供を可愛がること、要すれば土産をやる
- 二 病氣、皮膚病多し、医術救護を施してやる
- 三 たびたび応接して心安くなる
- 四 気長に対応する

五 学校に赴き、日本軍の安心できることを宣伝す

る

六 主婦、その他婦人を十分尊敬する

七 正義の軍なることを説明し、悪は絶対に排斥する
ること

四月十日、雨、胡翼武軍と終日交戦。午前三時頃より丁家河西北方からの敵の射撃に端を発し、我は黎明を待ち攻撃を加う。戦闘三時間にして白河舗に入城す。白家舗道の土民は敵と密接なる連絡あるものごとく、我々に好意ある如く見せて安心を与えていた。我々の十二時白河舗出発直後より、攻勢に転じ米たる敵は後方より急迫の手を緩むことなし。よって王家岡において反撃を企図し、全く包囲なしで一挙に反撃す。与えたる敵の損害多数、夕刻、新街に至りて宿営、降雨盛んなり。

四月十一日、雨、本朝二時、東家港駅衛兵所に敵襲を受け、一人戦死、一人負傷す。

四月十九日、交代部隊到着。雨が降り、柳の青葉が美しい。内地にいたら桜の見頃だろうか。「世の様は

移り変わりぬれど 変わりなきは我身なり」と言えるだけは幸福なんだと思っていればよいようだ。事変処理の対策や名案がいろいろとあるが、それは我々が抱負としてもっていればよいことで、依命一意、服従すべき現状では、何ら施すべき手だてもなし。

五月八日、峪山警備、毎日の不眠による行軍に心身共に疲れ果て、そのうえ炎熱の行軍とて倒れそうになることも多く、全く疲労困憊せるところを峪山に残り警備することになりしことを喜ぶ。蚤と南京虫とに悩みつづ疲労の極にあるとき、留まりて警備は全くありがたい。当地方は多少の起伏はあるものの、全くの平地で農業に適し、地質また良好であり平和なる農村の一小町である。

五月二十三日、十三時、本部呉家港出発、鐘洋を経て陳家集に向かう。曇天にして時々降雨、涼しくて満点の行軍日和なり。行軍約六里、鐘洋東方二里の蘭家店付近において、最も親しみある後藤中佐殿が、自分達にわざわざ面接に来駕され、固き握手を交わし、旧交しばし、愉快なる一時を過ごしたのであった。会え

て何となく子供のごとく上気するのを制することができなかつた。

五月二十四日、今回で四回目の行軍地域だが、もうあの鐘洋攻略当時の面目も姿も残っていない、大変な変わりようである。道路はあの当時の泥甕を思うとアスファルトの感じさえする程立派になった。

七月三十一日、南京を発ち、八月三日以島検疫所にて船中待機、八月七日、宇品に上陸、八月八日、帰還。二十日召集解除、除隊となる。

以上は丹波、丹後地方郷土の人の戦争体験記の中より抽出した一部分であります。

主人は豪胆で堅い人でした。帰って来た時は度々の作戦のためでしょう、手がふるえ、左の耳が聞こえなくなっておりましてので、病院で診断したらと何回も言いましたが、生きて帰っただけでもないではないかと、頑として聞きませんでした。恩給の申請もしませんでした。

昭和十八年、再度召集がくるまで、翼賛壮年団の役

員をしたり、在郷軍人会の会長をしたり、第一線の兵士に思いを馳せ、銃後の守りを固めるため、士気の高揚に努めるため、ゆっくりする暇がなくがんばりました。

昭和十八年の再度の召集により、福知山歩兵第二連隊に入隊しましたが、耳、手のふるえの関係もあつてでしょうか、連隊に籍を置いて舞鶴中学校の軍事教練の教官として、中学生に軍隊生活の経験を生かして指導に努力し、終戦を迎えました。

支那事変の功績により勲五等と金鵄勲章そして三千円の功労金を頂戴しました。当時としては三千円は大金でしたし、主人が送ってくれました毎月の給料も大切に貯金しておりましたが、戦後、貯蓄封鎖によりすっからかんになったばかりか、農地解放により小作人に農地は譲らねばならなくなり、加えて在郷軍人分會長と翼賛壮年団に籍を置いていたとの理由で公職追放にかかり、踏んだり蹴られたりの憐れさが残念でありませんでした。

戦後シベリアから引き揚げて来た方々のお世話をす

るため、舞鶴の引揚援護局にも勤め、課長にまでなっておりましたが、公職追放のため退職せざるを得なくなりしました。

農地解放から少しでも農地を残すため、農業をせねばならなくなりました。農業協同組合長にも推されましたが、戦争の後遺症とでも申しましようか、手のふるえが止まらないため、お断りすると共に、字を書くことも次第にやめるようになりました。

ただただ不思議なことに、支那事変中に背負っておりました背囊の真中に大きな弾丸の穴がパッキリ開いておりました。よくぞ皮一枚で止まり背中を貫通しなかった、神仏の御加護であろうと、不思議さと感謝を致しております。

休む暇もなくがんばり続けた主人が、平成九年五月三十一日、八十八歳でこの世を去りましたが、死の直前つぶやくように「多くの兵隊を亡くささずによかったです」と言ってお息を引き取りました。

昭和十四年七月十四日、第十一軍司令官岡村寧次閣下から授与されました感状は左記の通りです。

感 状

歩兵第二十一聯隊第七中隊

陸軍歩兵中尉 四方 為 夫

右ハ襄東会戦ニ方リ將校斥候長トシテ聯隊ノ安陸北方敵陣地攻撃ノ為敵情地形ノ搜索ニ任スルヤ昭和十四年四月三十日具ニ長寿店付近ノ敵ノ支援陣地ノ状況ヲ詳ニシ特ニ朱寶大橋付近ヨリ指向スル突破正面ハ其両側地区ニ比シ薄弱ニシテ乘スヘキ弱點ナルヲ確認シ以テ聯隊長ノ同方面突破ノ決意ヲ不動タラシメタルノミナス師団ノ企図スル敵陣地急襲突破ノ索案ニ牢固タル確信ヲ興ヘタリ以テ攻撃発起ニ先チ五月四日夜半再ヒ選バレテ將校斥候長トナリ聯隊ノ突破正面タル両合届付近ノ陣地ニ觸接シ敵情特ニ其動靜ヲ搜索スヘキ任ヲ受クルヤ勇躍所命ノ敵陣地ノ一角ニ潛入シ隱密裡ニ敵中深く行動シ剛膽巧妙ナル偵察ニ依テ両合届付近支援 陣地守兵ノ後退ノ状ヲ確認シ機ヲ逸セズ敵軍退却開始ノ判決ヲ報告シ以テ師団ヲシテ敵軍ノ退却初動ニ乗シ安陸北方敵陣地急襲突破並渡河ニ向フ神速果敢ナル追撃ヲ敢行スルノ端緒ヲ開ケリ

以上中尉ノ行為ハ任ニ服スル極メテ剛膽熱心機ヲ看ル頗ル敏慧偵察行動戦術上ノ判断亦秀抜ニシテ遺憾ナク将校斥候ノ本領ヲ發揮シテ師団作戦初期指導ヲシテ戦機ニ投セシムルニ至大ノ貢献ヲ致セルモノト謂フベク其武功拔群ナリ

仍テ茲ニ感状ヲ授与ス

昭和十四年七月十四日

第十一軍司令官 岡村寧次

また、陸上自衛隊第七普通科連隊福知山駐屯地にも資料を提供したり、自衛隊員の心構え等の指導にも努力し、昭和四十七年十二月二十六日付で、司令一等陸佐浜口孝和氏よりも感謝状を贈呈されております。

二度と戦争の悲劇を繰り返してはならないと、子供達とも話しております。